動詞固有の意味とアスペクト的意味*

ー或いは現代日本語の「変化動詞」のアスペクト的意味の正しい取り扱い方ー

小西 正人

0. はじめに

「本を読む」の「読む」などはある時間続くのを常とする動作であり、「ーている」をつけるとその動作が進行中であることを表す、よって此等を「継続動詞」と呼ぼう。「電燈が点く」の「点く」などは瞬間の作用を表し、「ーている」をつけるとその動作・作用が終わってその結果が残存していることを表す、よって此等を「瞬間動詞」と呼ぼう。金田一(1950)がそう宣言したのはもう半世紀も昔のことである。以来、いや、それ以前から、動詞とアスペクト的意味とは切っても切れない密接な関係をもつことが指摘されており、アスペクトの研究も動詞を中心として大きく前進してきた。

然し、あまりにこの二者を関係づけての研究が進められ(そして相応の成果を挙げ)てきた所為か、このふたつは本質的に、そして質的に同じものであるとの見解が(そうと知られないままに)受け入れられてきたように思われる。それはまるで、動詞の<音像>が書いてあるカードをめくると、裏にそのアスペクト的意味がそれぞれ書かれている、というくらい、アスペクト的意味が動詞自体にぴったりと貼り付いているかのように互いに関係づけられてきた。

然し実際、動詞はそこまで重い機能的負担を強いられているのであろうか。格支配にしてもそうであると考えられるが、仮に動詞がそこまでの重い役割を一手に担わされているとするなら、その動詞が文末にくる日本語では、話し手ははじめの言

---

*本稿は 1997 年京都大学大学院文学研究科提出修士論文および参考論文、ならびに 1997 年日本言語学会第 115 回大会口頭発表(詳しい内容については日本言語学会発行の予稿集参照)をより充実させたものである。したがって本稿とこれらの作品とが、内容面或いは個々の表現において重複しているところも少なからずあるが、読者の方々に「参考文献入手の労」を省いていただくために、自分のものに関してはできるだけ簡潔に本文に取り入れておくことにした。

以下の諸註は、本文だけでは誤解を生じそうな箇所に関してより詳しく説明を施したもの、或いは更に詳細な研究に関しての参照文献について述べたものである。したがって、本文を読む際にいちいち参照するのが手間であり、本文の論旨を追うことが困難であると感ぜられる場合には註釈抜きで読み進められたい。

葉を発する前に動詞を選択し格支配を徹底させ全文準備完了の状態で発話をはじめ、聞き手は動詞が出てくるまでの語の連鎖を全て宙ぶらりんのまま記憶室のどこかに待たせていることになる。もしそうであるならば、これはあまりにも言語表出／言語理解に対して負担を強いているシステムではないか。

本稿では、現代の研究においては殆ど融合してしまったように見える「動詞自体が固有にもっている意味」と「アスペクト的意味」を少しずつ切り離していくことを試みる。その手始めとして、本稿ではこれまで最もアスペクト的意味と密接に融合したものとして研究され考察されてきた「変化動詞」とよばれる一群の動詞に焦点を絞り、これらのふたつの意味(すなわち「動詞自体が固有にもっている意味」と「アスペクト的意味」)が、互いに密接に関係を保ちながらも独立しているものであるということを論じたい。そして今後の動詞研究／アスペクト(事象)研究への新しい手がかりとしたい。

本稿の構成を簡単に述べておく。まず第１章では変化動詞の概念について少しふれ、実際に変化動詞の採るアスペクト的意味を概観したあと、従来の研究を紹介し、それらの不備を指摘する。第２章では(本稿の考える)変化動詞と関係のあるアスペクト的意味の３つの形を措定し、この形のもつ意味を考える。続く第３章ではこの３つの形を具体的に活用しながらその有効性を確認する。そして第４章ではアスペクト的意味や事象構造に関係のある幾つかのトピックをとりあげ、本稿で主張する考え方に基づくアプローチを、不完全ながら試みたい[1]。最後の第５章では簡単なまとめと展望を述べる。

１．変化動詞のアスペクト研究の歴史とその不備

１．１　変化動詞とは

動詞という範疇は、実にさまざまな、バラエティに富んだものを要素としてもつ範疇のひとつである。それ故古来より、動詞の研究というのはまずその下位類の研究、分類の研究でもあった。統語的分類として代表的なのは、自動詞／他動詞の分類であろう。この分類方法は高度に発達した統語論の中で一定以上の成果を挙げ、現代言語学に貢献するところ大であった、と聞いている。

翻って意味論の分野においては、あまりに形而上的なものを除くと、「変化動詞」或いは「結果動詞」という下位類がしばしば話題になり、そしてまた研究の対

[1] この章には覚え書きに近いものも含めてあるので、本稿の本質的な主張のみを希望される方は軽く読み飛ばしていただいて結構です。

象になってきた。それはどのような下位類かというと、大まかに言えば「対象が変化を被ることをあらわす動詞」「その動詞のあらわす事象や作用が、起こる前と起こった後では対象(の状態)が変化を被っている、というような動詞」を指す下位類である。そしてこれらの「変化動詞」の概念は、半ば必然的にアスペクト的意味[2]と結びつけられ、その結果、次のような定説がたてられることになる。曰く「変化動詞は、その前と後では対象の状態が変化を被っているというような『特異点』をもつ限界動詞(telic verb)である」。すなわち変化自動詞「こわれる」においては、その動詞の示す特異点の前ではモノ(対象)はまだ「こわれていない」が、特異点の後では状態変化を受け、既にモノ(対象)は「こわれている」、ということである。

本稿は、これまで動詞自身がもっているとされてきたアスペクト的意味を、動詞がレキシコンにおいて本当にもっている固有の意味から隔離しようという目的をもっている。もう少しヴィヴィッドに表現するなら、動詞に融合しへばりついてしまっているアスペクト的意味を動詞本体から引き剥がすという難事業を為そうとしているものである。それ故、本稿では従来からよく知られている「変化動詞」という下位類に焦点を絞ってその事業を行うこととした。変化動詞を選んだのは、その下位類が最もよくアスペクト的意味との関連において語られるからである。また、ここで扱う個々の動詞については従来「変化動詞」として扱われてきたもの、と言うにとどめ、特にここでは定義を設けないでおく。それは「動詞自身のもつ意味」が全く見えていない中でそれについて変化が「ある／ない」と見極めるのは不可能であるし[3]、「変化動詞」以外の動詞に関して細かい観察を行う余裕と紙幅がないからでもある[4]。まずはアスペクト的意味と最も親密な関係にある「変化動詞」に焦点を絞り込み徹底的に調べ上げることにより、変化動詞以外の動詞に関しても正しい取り扱い方が見えてくると考えている。

１．２　変化動詞のもつさまざまなアスペクト的意味

それでは本節では変化動詞を含む文のアスペクト的意味について、具体的に見て

---

[2] 事象の形式や事象の意味、と言っても構わない。

[3] 例えば従来変化動詞とされてきた「あける」については、「一生懸命あけたがあかなかった」という文においては変化を含意していないし、逆に従来変化動詞ではないとされてきた「蹴る」については、「ゴールキーパーにボールを蹴る」という文においてはボールがゴールキーパーにわたるという変化を含意し得る。

[4] よって本稿では変化動詞以外の動詞との関係については扱わない。

いくことにする[5]。

これらの変化動詞という一群の動詞は、どの場合においても常に同じ形の事象の同じ局面を指しているのだろうか。以下の例を見ると、決してそうではないことがわかる[6]。

(1.1)a.はじめの３分間は加速度的に温度があがります
b.たったの３分で温度は80℃にあがります
c.はじめの３分間は温度は80℃にあがりますのでご注意下さい
(1.2)a.その後も５分ほど、中から水が出ますので…
b.水は５分ですべて外に出ます／５分で外に出て下さい
c.はじめの３分、水はすべて外に出ます／５分間外に出て下さい

(1.1)(1.2)の両例文とも、a.は変化事象の「変化している／しつつある」局面を指し、b.は変化事象の「(変化前と変化後をくらべたときの)状態の変化」の局面を指し、c.は変化事象の「変化後の結果状態の維持」の局面を指している。すなわち、ひとつの動詞(形式)によって３つの局面を指すことができるのである。このことは、変化動詞は単一のアスペクト的意味をあらわす下位類であるという主張を真っ向から否定するものであり、事実それは否定されるべきであることを、これらの例文は示しているのである。

更に否定されるべき従来の主張がある。それは「特異点」に関するものである(１.１参照)。「殆どの変化動詞はこの『特異点』の前後で対象の状態が変化することをあらわす」という通説は、あまりにも強力である。変化動詞を「語彙分解」したものを見ても必ずといっていいほど「出る＝『ｙが外にある』という状態になる」「こわす＝ｘが『ｙ＝こわれた』状態にする」というように「対象ｙが／を(そうでない状態から)ある状態Ｓになる／する」という形で提示される。然し実際のところ殆どの変化動詞は変化の完了する特異点をもたない事象もあらわすことができる。それが(1.1a)(1.2a)の両例文である。これらの例文において「特異点」とは

[5] 従来の研究には、ひとつの動詞(形式)がひとつのアスペクト的意味を実現するというのではない、としているものもあるが、考察の対象が例えば「～ている」のような接続形式(アスペクト補助動詞)を接続させたあとの形であったり、動詞と共起する項が別のものであったりして、アスペクト的意味を担っているのがどの部分であるのかが判りにくくなっている。それ故本稿ではアスペクト補助動詞(「～ている」、「～続ける」など)が接続した形や、完了的意味を含むことのあるタ形の形式はできるだけ扱わないことにする。また動詞形式が文述語として用いられた場合を扱い、名詞を修飾する形のものについては扱わない。

[6] できるだけ同じ条件を保つ為に項は同じものをとるようにした。また、それぞれのアスペクト的意味の違いがわかりやすいようにわざと異なった期間修飾表現をつけてその部分を際立たせてある。

いったいどの点だろうか。「温度があがった状態」？「水が外に出た状態」？いや、そうではあるまい。温度があがっていくこと、水が外に出ていくこと、そのプロセス自体が「あがる」であらわされ、「出る」であらわされているのだ。特異点はない。それは典型的に「特異点をもつ限界動詞」として知られる変化自動詞「こわれる」が特異点をもたない変化事象をあらわすことができるという観察事実からも、「変化動詞＝特異点をもつ限界動詞」の図式を打ち破ることができる。次はその例である。

(1.3) 補強のできない５時までは、この壁は少しずつこわれますから、側に近寄らないようにお願いいたします

対応する他動詞形も同じく特異点をもたない変化をあらわすことができる。

(1.4) ５時までの２時間、この壁をこわす
(1.5) はじめの５分間はどんどん温度をあげてください

また、これらの特性を使って次のような文を矛盾なく作ることもできる。

(1.6) だいぶ太ったけれど、それで太ったとはいわないよ

蛇足ながら言葉を足すと、これは「太るという変化はあったけれども、その結果としていま『太い』という状態にあるわけではない」ということを意味している。

これらのことは、後述する「特定のアスペクト的意味を採れない動詞」(４.５参照)と比較すると、判り易い。次の文は、特異点をもたず、変化主体(＝対象)が単数であるという変化事象をあらわしていると考えると、非文となる。

(1.7) #[7] ５時までの２時間、この人を殺す
(1.8) #だいぶ死んだけれど、死んではいない

以上のところで、ひとつの動詞(の語彙形式)があったときに、それを含む文があらわすアスペクト的意味はひとつに決定されるわけではない、ということがあらた

[7] #は、求める意味での解釈ができず、他の意味での解釈しかできないことを示す。例文(1.8)での「他の意味」とは、「５時までの２時間、この人を死んだ状態に保っておく」ということである。この文の容認性については後述の脚註14も参照。

めて示せたと思う。

1．3　金田一(1950)らの主張＝多義説とその不備

前節において、ひとつの動詞形式は複数のアスペクト的意味をあらわすことができるという事実が明らかになった。これを解決する方法として、金田一(1950)や井上(1989)では、動詞(形式)は単一の「アスペクト的意味類」に所属するというのではなく、その多くは幾つかの類に所属している、という考えが採られている。例えば金田一(1950)は

(1.9)a. この釘は曲っている
　　b. この道は曲っている

の２文のうち、(1.9a)の「曲る」は元々まっすぐであったものがある時に曲がったのであるから瞬間動詞であるのに対し、(1.9b)の「曲る」ははじめから曲がっているのであるから第四種の動詞である、と述べ、ひとつの動詞形式がいくつもの類に属していると考えている。また、井上(1989)も、素性の束による分析を行ったあとで、「ただし…多くの動詞が複数の類に属する可能性があり、ここの例はあくまで分類の代表的な例示に過ぎない」(ibid.:183)と述べ、同じくひとつの動詞形式が複数の類に属しているという分析を示唆している。

然し、この考え方はよく吟味してみると、幾つかの点で不備があることがわかる。まず、このような説明を行うということは、ひとつの語彙形式が複数のアスペクト的意味を「その固有の意味」としてもつとレキシコンに登録されている、と主張していることになる。言い換えると「その動詞は多義である」と言っているのである。然し実際金田一(1950)の例(本稿の(1.9)の例)について、「釘が曲っている」の「曲る」と「道が曲っている」の「曲る」が異なった意味であると主張するのは我々の言語直感に照らしてみるときにあまりに実感にそぐわないように思われるし、例文(1.1)のそれぞれの「(温度が)あがる」という動詞形式が「多義」であり、「あがる１」「あがる２」「あがる３」のようにレキシコンにおいて区別されなければならないとは、これもまた直感的には思えない。

また、この「多義説」はシステマティックな多義を説明できない、という欠点もある。単なる「多義」であるなら、どのアスペクト的意味類も(ある程度)等価のはずである(井上(1989)の枠組みでいうなら、どのアスペクト素性も等価のはずである)。ところが実際の例を見てみると、その「多義具合」には偏りがあり、また体系的でもある。上の多義説では、このような偏向性や体系性がなぜ生じるのか、説明することは困難である。

さらに、この「多義説」では動詞そのものに多義を認めているため、構文や共起する語句によってなぜ解釈されるアスペクト的意味が制限されるのか、説明ができない。例えば以下の例を見てみたい。

(1.10)a. 5分間勉強部屋に入る
　　b. 5分間どんどん水が中に入る

(1.10a)の例では(1.1c)と同じ「変化後の結果状態の維持」のアスペクト的意味として通常は解釈されるのに対し、(1.10b)の例では寧ろ(1.1a)と同じ「変化している／変化しつつある」アスペクト的意味として解釈される。動詞はもともとこれらのアスペクト的意味をレキシコンの段階においてもっているのだ、とする多義説では、では逆になぜ(1.10)のそれぞれの文がそれ以外のアスペクト的意味をもたないのか、もしくはもち得ないのかということを説明できないのである。

以上の理由から、多くの動詞は複数の「アスペクト的意味類」に所属している、という金田一(1950)や井上(1989)の主張は認めることはできない。

1．4　仁田(1989)らの主張＝転義説とその不備

ひとつの動詞形式がいくつものアスペクト的意味をもつ、という事実を説明するために、前節でとりあげた「多義説」以外の説明もなされてきた。それが本節でとりあげる仁田(1989)や森山(1983)らの主張である。すなわち、動詞のもつアスペクト的意味はもともとはひとつで、それが異なったアスペクト的意味をもってあらわれることがあるのは、(それぞれの文において)他の共起語句などの外からの要因によって、動詞自身が本来的にもっていたアスペクト的意味が変えられるからである、と説明するものである。仁田(1989)は、「(動詞のもつアスペクト的意味は)その動詞がどういった語彙－統語的な下位類に属しているかによって、あらかじめ原則的に決まっている」(ibid.:57)と述べ、「その語の有している本来的な文法的振る舞い方は、実際の文の中では、他のある語と共起・併存することによって、抑圧されたり、変更されたりする」(ibid.:65)として、共起語句が動詞のもつ本来的なアスペクト的意味を変更すると考えている。また森山(1983)は、動詞だけの意味から最終的なアスペクト的意味が決められているわけではなく寧ろ＜出来事＞のレベル（森山(1983)ではアスペクトプロポジションのレベルとよばれている）において決められるべきである、としながらも、基本的には「動詞の動きとしての意味が、他の条件によるぬりかえもなしに、そのまま、＜出来事＞としても同じアスペクトの意味を実現することもあるが、……他の条件によってぬりかえられ、＜出来事＞としての意味が違ってくることもある」(ibid.:2)と述べ、動詞自身がもつアスペクト的意味が

変更を受けたため異なった種類のアスペクト的意味が生じる、との見方を採っている。よってこのような「それぞれの動詞が本来的にもっているアスペクト的意味は、共起する語句の影響などにより変更を受けて異なったアスペクト的意味を実現することがある」という主張を「転義説」とよぶことにする[8]。

実はこの転義説も、ひとつの動詞形式が複数の異なったアスペクト的意味をもつ事実を説明するのに適した主張であるとはいえない。それは以下の理由による。

ひとつは、複数のアスペクト的意味をもつ動詞形式がある場合、その何れを「基本義」と見做し、その何れを「二次義」と見做すかの判定が(多くの場合)困難であるし、その決定的な証拠となるものがないということである。例えば仁田(1983)では、始動相「～ダス、～ハジメル」と共起可能であるかどうかということが＜＋／－過程性＞の判断の基準であるとしているが、

(1.11)a. ビルをこわす
　　b. 壺をこわす

という２文を考えた場合、(1.11a)は「ビルをこわしはじめる」という表現ができるので＜＋過程性＞であり、(1.11b)は「*壺をこわしはじめる」という表現が(通常)できないので＜－過程性＞である、との判定になる。このとき、動詞「こわす」が本来的にもっているアスペクト的意味は＜＋過程性＞であるのか＜－過程性＞であるのか、決定することはできないのではないかと思われる[9]。本稿に即した例でいうなら、冒頭の(1.1)の例はどうであろう。この３つの「あがる」のうちどれが基本義でどれが二次義であるか、恣意的な判断ではなく決定する基準は果たして存在するのであろうか。

この転義説を不備とする理由は他にもある。それは、何をもって「転義」が行われるのかが不明である、ということである。先に挙げた仁田(1989)では、文の中で共起・併存する語が本来的なアスペクト的意味を抑圧したり変更したりする、とされている。ところが実際の例を見てみると、必ずしもそうとはいえない例が数多く見つかる。

例えば、変化他動詞「こわす」は、過程性についてレキシコンの段階で＋の値がついているとしよう。そして、それは共起する「壺」という名詞(句)により値が－

[8] 仁田(1989)では「変容」とよばれている。

[9] しかも文としては同じ表現である「椅子をこわす」になると、その指示対象となっている椅子が大きなものであるのか小さなものであるのかによって＜＋／－過程性＞の判断が変わってくる。その場合には尚のことどちらが基本的な意味であるのかを決定することはできないであろう。

に転換される、という説明が成り立ち得よう((1.11)の各例文)。それではこういう状況の中、子供が以下のように尋ねた場合、この文に含まれる動詞の過程性についてはどのように判断するのだろう。

(1.12) お兄ちゃん、今日もこわすの？

このお兄ちゃんが昨日ビルをこわしていたのなら、動詞の過程性は＋ということになろう。然しこわしていたのが壺であったとしたら、その動詞はいつ、何によって過程性の値が－に転換したのであろうか。

「省略表現を補って考えなければならない」という反論もあるかもしれない。では以下のように子供が尋ねたとしたら？

(1.13) お兄ちゃん、今日はどれをこわすの？

「疑問詞のような、変項をあらわしうる表現を含んでいるためにアスペクト的意味についての正しい判定ができないのだ」というのであれば、それではこれはどうだろう。冒頭の「温度があがる」例に戻ろう。

(1.14) 温度はもうずっとあがりっぱなしだ

この文は所謂「省略」のない、完全な文である。それにも拘わらず、この文があらわす事象が「温度が漸次的にあがり続けているというプロセス＝(1.1a)と並行的なアスペクト的意味」であるのか、それとも「ある一定の温度にあがった結果状態の維持＝(1.1c)と並行的なアスペクト的意味」であるのかは、この文からだけでは決定することはできない。

仁田(1989)では共起する名詞の種類によってある種のアスペクト形式(この場合は「～しおわった」)との結合能力が影響を受ける例として、次のようなものが挙げられている。

(1.13)a. 彼は芝居を見おわった。
b. *彼は海を見おわった。　　(文法性判断は仁田(1989:62)による)

然しこの(1.13b)の例文にしても、文脈によっては充分解釈可能となってくるのである(例えば一日のスケジュールで山・海・空のそれぞれを見なければならない場合「海は見おわったよ」と言えるだろうと思われる)。これは勿論「見る」の意

味が変わったわけではないし、「海」という名詞(句)にその責があるわけでもないだろう。このような場合は何をもってアスペクト的意味を転換させたというのであろうか。

「動詞はレキシコンの段階においてたったひとつのアスペクト的意味を有しており、共起する語句の(アスペクト的)性質を掛け合わせることによってその動詞の文法的な振る舞い方および実現するアスペクト的意味は機械的に計算可能であり予測可能である」という考え方は、魅力的ではあるけれども、これらの例よりそのまま認めるわけにはいかない。アスペクト的意味は、文の構成要素から一義的に計算可能という訳ではないのである。実際、本稿でも主張していくとおり、レキシコンや統語情報は、アスペクト的意味の決定に対し非常に大きな制約／制御力をもつが、完全に統制しているとはいえない。すなわち、アスペクト的意味はレキシコンに従属するものでない、ということである。

１．５　語彙概念構造表示とアスペクト的意味

近年、過剰な統語論を抑制し、より等身大の文法を構築しようという目的ですすめられてきた研究の中で、発展が著しいもののひとつに語彙概念構造表示の理論を挙げることができる。この語彙概念構造の意味論とは、基本的には「語彙は意味構造をもっており、単なる意味素性の束ではない」という主張を基に構造としての語彙の意味を探っていくという形を採る意味論である。本節では語彙概念構造に事象構造のレベルの設定を取り込んだ Pustejovsky(1992)と、日本語の動詞の語彙概念構造について詳細な提示を行った影山(1996)を簡単にとりあげ、アスペクト的意味との関係について述べることにする[10]。

１．５．１　Pustejovsky(1992)の事象構造とその不備

従来の語彙概念構造(語彙意味表示)の理論とこの Pustejovsky(1992)の理論が異なるところは、先にも述べたように語彙概念構造に事象構造のレベルを設定しているということである。彼は事象構造における基本的な事象タイプを state(S)、process(P)、transition(T)の３つに設定し、修飾表現などによる事象合成も行うことができる、と述べている(ibid.:63)。例えば彼は

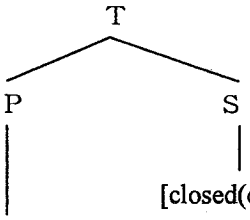
(1. 14) a. John closed the door.

という文に対し、次のような概念構造を与えている(ibid.:58)。

[10] 両論文に対するやや詳細な批判は小西(1997b)を参照。

(1. 14) b.

ES：



LCS'：

[closed(door)]

[act(j,the-door)＆¬ closed(the-door)]

LCS：

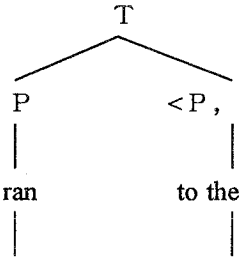
cause([act(j,the-door)],become([closed(the-door)]))

そして、事象合成については次のようなものを例にとり、事象タイプが異なることを述べている(ibid.:63)。

(1. 15) a. Mary ran to the store.

b.

ES：



LCS'：

Mary ran to the store

[run(m)] [at(m,the-store)]

LCS：

cause(act(m),become(at(m,the-store))BY run)

簡潔に述べよう。Pustejovsky(1992)が、語彙概念構造の中に事象構造のレベルを認めこれを取り出したのは、鋭い分析であった。然し、そこから先の彼の分析はふたつの根本的な問題を含んでいる。

ひとつは、この Pustejovsky(1992)もまた、動詞固有の意味のなかに事象構造(＝アスペクト的意味)を内在させてしまっているということである。このふたつは切り離して考えなければならない、ということはここまでも何度かふれてきたし、この後も何度も出てくることになる中心的な主張である。

いまひとつは、事象合成についての問題である。このような「合成的」にアスペクトを規定することができるという考え方は、アスペクト的意味を変換する演算子(例えば(1. 15)における‘to the store’)を設定するという考え方につながる。しかし、これは言い換えると明示的な演算子がなければアスペクト的意味は「変換」す

ることができない、ということになる。勿論この主張は誤りである。

「個々の動詞の概念構造には事象構造の意味を表す部分があり、その構造部分は合成などの関数的処理が可能である」という彼の主張は、結局前節で批判の対象としてきた日本語における「アスペクト転義説」の考え方と同じである、ということなのである。既に前節で転義説に対する批判を行ってきたのでここでは繰り返すことはしないが、その同じ批判が Pustejovsky (1992) の示すモデルにも向けることができるのである。

1．5．2　影山(1996)の概念構造とその不備

影山(1996)は日本語と英語の対照研究を基に、日本語動詞の語彙概念構造について詳細な記述を行ったものである。それ故扱っている範囲も多岐に亘っており、その全てについてここで見ている余裕はない。そこで本節では影山(1996:60-63)の「抽象的な変化[11]」を中心に、本稿の主張するアスペクト的意味との関係を見ていきたい。

まず影山(1996)は、日本語の状態変化動詞の語彙概念構造の多くは、意味述語 BECOME を含む構造であらわされるとして、次のような例を挙げている。

(1.16) a. *金属が　数時間　冷えた。
　　b. *スープが　２，３分だけ　温まった。
　　(文法性判断は影山(1996:61)による)

そして対応する他動詞文(1.17)において同様の表現が可能であるのは、時間副詞(期間修飾表現)が使役(CAUSE)という過程にかかるからである、と説明をしている。

(1.17) a. スープを５～６分温める。
　　b. 焼けた金属を１０分間ほどさます。

この部分には非常に多くの問題が含まれているのであるが、それらは小西(1997b)である程度詳細に扱ったので、ここでは重要なところだけを指摘するに留める。

まず「変化自動詞」であるが、今までの例文でも見てきたとおり、「変化している／しつつある」局面を指すことができる。同じ「冷える」で例文を見てみよう。

[11] 影山(1996) 2．4．3。このタイトルは前節の「2．4．2 物理的な移動」と対照されているものである。

(1.18) 反応後はじめの数秒は冷えますが、すぐに温まります

逆に変化他動詞であっても期間修飾表現と共起できないものもある。

(1.19) #２０分、ボブを殺す[12]

また、影山(1996)の定式化を使うと「太る」という動詞は

(1.20) [EVENT BECOME [STATE y BE AT-太い]]

という語彙概念構造をもつことになる。しかし、

(1.21) ２箇月で３キロも太る

といったときに、３キロ太った後の体重が48キロであるというのであれば、日本人の成人としては [STATE y BE AT-太い] とはいえない(例文(1.6)も参照)。これもまた多くの状態変化動詞は意味述語 BECOME をもつとは限らない、という例である[13]。

また、影山(1996)では移動動詞と抽象変化動詞との並行性を主張している。そして移動動詞の箇所では、「「どんどん」は動作の進行を意味するから、MOVE とは共起するが、BECOME とは矛盾する」(ibid.:59)として修飾表現「どんどん」が判定のテストとして用いられている。それを抽象的変化動詞にも並行的にあてはめるならば、その多くは(変化自動詞であっても)「どんどん」と完全に共起可能である。

(1.22)a. どんどん冷える

---

[12] 念の為に言い添えるが、これは(1.1a)と並行的な「変化している／しつつある」局面の意味で解釈できないことをあらわしている。

[13] 或いは逆に、「こわれている状態Ｓ」があるとする。変化自動詞「こわれる」の意味が「こわれている状態Ｓへの移行／Ｓになること」であるとするなら、「よりいっそうこわれている状態Ｓ'」からＳに状態が変化したときも「こわれる」と表現できるはずであるが、事実はそうではない。例文(1.1a)と同じような「変化している／変化しつつある」局面をあらわす場合はBECOMEよりは寧ろ「MOVE TOWARD ～」とでもいったような、或いはより正確にいうならば「評価軸／尺度上の／に沿った、～という方向(～はベクトルであり、ゴールではない)への変化或いは動き」とあらわしたほうがより事実に即しているし、直感にも近いような気がする。

b. どんどんくずれる

これらのことから、日本語の変化動詞の多くは意味述語 BECOME を含む、とする影山(1996)の主張は認められない[14]。

以上のところで、従来の動詞分類を中心とするアスペクト的意味の研究が、さまざまな現象に対して適切な分析を提示できていないということがよりいっそう明らかになった。それでは次章から、本稿の主張するアスペクト的意味の取り扱い方に

---

[14] 本稿を読みすすめていくとアスペクト的意味の位置づけも明確になってくると思われるのだが、ここで影山(1996)の主張する語彙概念構造のもつ意味についてひとこと付け加えておく。これについては小西(1997b)で詳しく取り扱ったので、該当部分の抜粋をここに貼り付けることにする。

２．２．６　影山(1996)の表示の意味

影山(1996)は日本語の動詞全般に亘って、実例に基づいた精緻な観察をもとに詳細な記述がなされているうえに理論的な整合性もとれており、本編およびこの補論は基本的にこの枠組みを支持する立場から書かれたものである。ただ変化事象表現におけるある種のアスペクト的意味については、影山(1996)が主張するように語彙概念構造の一部として語彙が固有に持っていると考えるべきものではなく、むしろ別のレベル＝事象解釈のレベルで与えられるべきものであると主張するものである。実際影山(1996:58)は本編でも扱った「持続過程」については以下のように述べている。

森山(1988)は

(24) a. 時計がしばらく止まった。

b. *友人がしばらく死んだ。

(24)のような例を観察し、継続時間表現が取れる「止まる、入れる」などの動詞について「結果持続」という意味特徴を設定している。しかし、これが本当に意味論上の性質なのかそれとも語用論的な意味合いなのかは、さらに検討する必要があるだろう。

「死ぬ」でも、命が再生することが可能なら、

(25a)のような言い方ができると思われる。

(25) a. しばらく死んで、また生き返った。

この「結果持続」と同じように、終結点に関しても(結果状態特定事象を表すもの以外は)動詞自体は意味情報をもっていないと考えてもいいだろう。そしてその動詞を使って表される変化事象を我々がどう解釈するかという事象解釈のレベルに至ってはじめてそういったアスペクト的意味が与えられるのである。それ故、影山(1996)の示した MOVE や BECOME という意味述語のついた表示はむしろ事象解釈のレベルを通過したあとに出てくる意味表示であり、その表示方法と結びついた他の理論的説明を本編は根本的に否定するものではない。ただ、その表示は「語彙意味表示」ではない、ということである。

ついて、順を追って見ていくことにしたい。

2．変化動詞と関係のあるアスペクト的意味の３つの形

2．1　動詞とアスペクト的意味の関係

第１章において、従来の研究はアスペクト的意味に関して正しい分析を提示できていないということが明らかになった。その最大の原因は、アスペクト的意味は、動詞がレキシコンにおいて固有にもつ意味であり、その動詞を含む文はそれに基づいたアスペクト的意味をあらわさなければならない、という固定観念にとらわれていたことである。本稿では、アスペクト的意味は個々の動詞に内在されているとは考えない。動詞と、アスペクト的意味とは、互いに緊密な関係をもちながらもどちらかがどちらかに従属するものではなく、その意味ではお互いに独立していると考える（１．４参照）。寧ろ、共起する名詞句や修飾表現などと共謀して、その文のあらわし得る可能なアスペクト的意味を制限するようにはたらくと考えるべきである。この章では、まず変化動詞に関係のあるアスペクト的意味の簡単な３つの形を措定する（２．２）。そしてその３つの形について注意すべきことを簡単に述べる（２．３－２．５）。３つの形の具体的な適用に関しては第３章以下で見ていくことにする。

2．2　変化動詞に関係する３つのアスペクト的意味の形

本節では日本語の変化動詞に関係のあるアスペクト的意味の３つの形を措定する。冒頭の例文(1.1)のそれぞれがその３つの意味をあらわしているので、ここに再掲する。

(1.1)（再掲）

a. はじめの３分間は加速度的に温度があがります

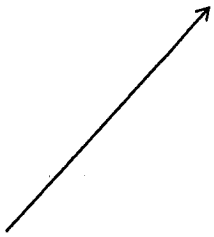
b. たったの３分で温度は80℃にあがります

c. はじめの３分間は温度は80℃にあがりますのでご注意下さい

次に、それぞれの例文とそれがあらわすアスペクト的意味について簡単な説明を行う。以下で、それぞれの形について視覚的に捉えやすいように図を示したが、あくまでそれは捉えやすさのためであって、厳密なものではない。概ね横方向が時間を、縦方向が変化度合を、そしてｏが終結点をあらわしている。また、いずれの場合も変化する対象に関するアスペクト的意味のみをあらわしており、「はたらきか

け(ひきおこし)手」と関係してくる部分の表示を含まない[15]。

①漸次変化過程形（Process of Gradual Change）
（＝(1. 1a)）



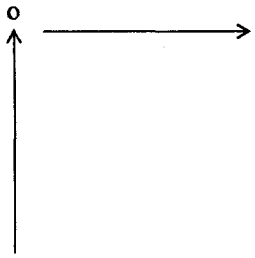
少しずつ、だんだん、どんどん、
前より少し、ゆっくり、等と共起

②移行形（Transition）
（＝(1. 1b)）

５分で、明日までに、
６時に、３回、　　等と共起

[15]「はたらきかけ(ひきおこし)手」とは、変化事象をひきおこすと解釈される主体のことであり、これはおおよそ影山(1996)の CONTROL の前項に相当すると考える。影山(1996:86)では CONTROL について「X CONTROL Y ＝ XがYの成立を直接的に左右する」と規定し、Yの成立を含意する CAUSE とは区別すべきであることを強調している。本稿ではこの定式化にそった形で、「ひきおこし手」がX、「変化事象(＝対象の変化を表したもの)」がYにあたると考える。勿論、何が「ひきおこし手」になるのかということについては話し手の意図や聞き手の解釈に委ねられている。「スイカを冷やす」という文において、ひきおこし手を、冷蔵庫にスイカを入れた人間と考えるか、冷蔵庫自身と考えるかは、それぞれの場合と判断による。

③結果維持過程形（Process of Maintenance of Result（after Change））[16]
（＝(1.1c)）



そのまま、等と共起

また、①の漸次変化過程形と③の結果維持過程形は非有界(unbounded)[17]であるので、「２時間」「～まで」「～続ける」等の形式と共起することができる。

２．３　プリミティブをあらわしているのでないこと

前節において、日本語の変化動詞に関係のあるアスペクト的意味の３つの形を概略ではあるが分類・措定してみた。ここで注意しなければならないのは、ひとつには、前節の３つの形は所謂プリミティブをあらわしているのではないということである。言い換えると、前節の３つの形がアスペクト意味原子的なもの(すなわちこれ以上分解されない究極のかたち)ではないということである。それはまた、逆にいうならばそれらの形は更に何かの要素に分解される可能性をもつ、ということでもある。例えば、③の結果維持過程形は、「②の移行形＋過程」というように分解できるかもしれない。その場合は然し①の漸次変化過程形に関しても「②＋過程」と分解しなければならないだろう(NOT 変化→変化開始、という移行として)。その場合、変化の累積性について(すなわち、時間の進行にしたがって対象に変化が蓄積されていくかどうかということに関して)は、また別の軸をとってあらわすことになろう。本稿が目的とするのは、アスペクト的意味に関して最終的／究極的な原子／要素を決定／措定することではない。ある段階において、日本語の変化動詞

[16] ③における移行変化の部分は本質的なものではないようである。例えば次のような例文においては、既に温度上昇が為されてからのことを指す場合にも使用することができる：例)このまま３分間温度を80℃にあげる。

[17] 有界性(boundedness)の定義については Declerck(1979)による。Declerck(1979:766)では有界性について以下のように書かれている－ a bounded sentence represents a situation as terminating and cannot, therefore, be used to refer to a situation that has not yet reached the terminal point referred to in the sentence。更に詳しいことについては直接この論文を参照いただきたい。

に関係する文は、３つのアスペクト的意味をもつことができる、そしてそれらは共起表現によって明示的に分類が可能である(＝その段階において互いに排反である)、ということで充分である。

また、この３つの形は変化動詞に関係する文に関して網羅的に考察を加えて析出されてきたものではない。よって本稿において全くふれられていないアスペクト的意味が実際使用されている場合もあるかもしれないが、本稿の主要な目的が、アスペクト的意味を動詞意味から剥離するということにあること、そして対象とする変化動詞という概念自体がもともと定義が曖昧であったことなどを考慮に入れ、網羅的でないという批判に対しては寛恕をお願いしたい。

２．４　素性でなく構造であること

この部分は語彙概念構造と志を同じくするところである(たぶん)。少なくともひとつ、素性表記にできない理由がある。それは構成要素の時間的(もしくは線条的)な順番をあらわすことができなくなってしまうということである。例えば③の終結点(図では o で表記)をあらわすのに、ここでは結果維持過程の前に変化が終結していることが本質的に大事であるにも拘わらず、もしこれを素性表記でもして［＋終結点］としてしまえば、それが結果維持過程の前に来るものであるのか後に来るものであるのかがわからなくなってしまう。以上の理由で、素性表記は採らない。

２．５　十全にあらわしているのでないこと

いまひとつ、これらのアスペクト意味表示について註釈をしておかなければならないことがある。それは、これらの形であらわされた、ある文や言語表現のもつ＜客観的な＞アスペクト的意味は、話し手の意図した、もしくは聞き手の解釈したアスペクト的意味全体を十全に表示しきっているものではない、ということである。具体例でいうならば、例えば「６時に」という共起表現を伴うことにより②の移行形のアスペクト的意味をもつ文(2.1a)は、それとは別に話し手の意図もしくは聞き手の解釈によっては複数回生起という((2.1b)と同じような)アスペクト的意味をも所有しうる、ということである。

(2.1)a. ６時にはがれる
　　b. この３日間毎日、６時にはがれる

改めて言うまでもないが、(2.1b)は複数回生起について明示的にあらわしただけで、(2.1a)の文においても適切な(質問などの)文脈やコンテクストを与えてやることにより複数回生起というアスペクト的意味をあらわすことが可能である。これらの事

実は何をあらわしているのであろうか。

言語表現というのは、我々が所有(もしくは表出)している／することのできる＜意味＞への「しるし」であり、「てがかり」であるにすぎない。我々は言語を「使って」＜意味＞を構築していくのである。言語を「使う」という場合、よく持ち出されるのが「言語を道具として使う」という言語道具観であるが、ここでは寧ろ言語は＜意味＞を構築する「材料」として使われる、というイメージのほうが近い。あらゆる文脈、あらゆるコンテクストもまた同等に、＜意味＞への材料となり得る。それ故、ある言語表現に対応する「意味」が十全に意図された＜意味＞をあらわしていなくても全く構わないし、寧ろそのほうが自然である。ただ、その言語表現に対応する「意味」は、意図された＜意味＞の一部に組み込まれている必要がある。そうでなければ材料として使われたとはいえない。(2.1a)の言語表現であらわされる「意味」は、複数回生起という＜意味＞へと参入／参画していくことが可能なのである。そしてそれに対して(2.1b)のほうは、言語表現の段階において既に複数回生起という「意味」を指定してあるので、非複数回生起という＜意味＞へ逆戻りすることはできない[18]。

では次章で、アスペクト的意味をあらわすこの３つの形をもう少し具体的に見ていくことにする。

３．アスペクト的意味の３つの形の適用

この章では第２章で措定したアスペクト的意味の３つの形をより実際の形に即した形で「実感」するために幾つかの具体例を見ていく。

(3.1) もっとゼリーをかためて下さい

例えば(3.1)の例文は、複数のアスペクト的意味をあらわしている。ひとつは①の漸次変化過程形のアスペクト的意味で、これを採ると文の意味としては「もっとゼリーをかたくして下さい、今のでは柔らかすぎるので」というような意味になる。②の移行形のアスペクト的意味を採る場合、文の意味は「もっと多くのゼリーをかためて下さい、今のでは少なすぎるので」というような、変化対象の複数性(あるいは量的側面)に関連する意味をもってくる。③の結果維持過程のアスペクト的意味を採る場合、今度は「もっと長い間ゼリーをかたいままにしておいて下さい、今

[18] これは「意志動詞」に関しても同じことがいえる。詳しくは小西(1998)参照。

のでは短すぎるので」という意味になる[19]。
同じような例では次のものがある。

(3.2) 風船をこれ以上膨らませないで下さい

この文が①の漸次変化過程形のアスペクト的意味を採るとき、文の意味は「これ以上大きく膨らませないで下さい」ということになる。②の移行形のアスペクト的意味で解釈するならば、その文は「これ以上多く膨らませないで下さい」という意味になる。③の結果維持過程形のアスペクト的意味を採るなら、先の例と同様に「これ以上長い間膨らませないで下さい」という意味になる。
もう少し通りの悪い例を考えてみよう。次のようなものはどうだろうか。

(3.3) ２時間壺をこわす

「こわす」はしばしば「瞬間動詞」として扱われる代表のような動詞であり、(3.3)のような文は、従来の分析では辛うじて②の移行形のアスペクト的意味と絡めて「非文ではないが変則的な文」として処理されてきた類いの文である。然し実際は、そのように意味が限定されることはない。ひとつひとつ丁寧に見てゆこう。
まず①の漸次変化過程形のアスペクト的意味を採る場合、意味は「２時間のあいだ、壺がだんだんこわれていく」となるはずである。実際、次のような例文を考えてやるとこの意味は実現している[20]。

(3.4) はじめの２時間はどんどんこの壺をこわし、次の１時間でどこまで修復できるかを競う

②の移行形のアスペクト的意味を採る場合、この形は過程部分をもっていないために、直接「２時間」という期間修飾表現と結びつくことはできない。よって先ほ

[19] ゼリーの場合は一度かためるとあとはその状態を維持するのにはたらきかけは必要ないと考えられる場合が多いので、③の意味にはとりにくいかもしれない。然し、次のような例文においては「かためる」も充分③の結果維持過程形のアスペクト的意味を実現し得るといってよいと思われる。(例)「この溶剤を混ぜると５分間かためることができますが」「５分ですか……もっとかためて下さい。できませんか。」
[20] 影山(1996:62-63)では、変化他動詞の場合に「２時間」のような持続的意味をもつ副詞句(期間修飾表現)が共起することができるのは他動詞のもつ CAUSE という意味成分による、と説明しているが、必ずしもその所為だけでないことは小西(1997b)において明らかにしたので、以下の例に関しても動詞が他動詞であることは関係しないと考えてよい。

どのふたつの例(3.1-2)と同じように、複数回生起の意味をもつことになる。

(3.5) この２時間、何度も／幾つも壺をこわす

③の結果維持過程形のアスペクト的意味にも、実はこの文はとりにくい。それはわざとそういう動詞を選んだからであるのだが、アスペクト的意味の形と照らし合わせて考えると③の意味というのは「２時間壺をこわれたままにしておく」という意味となるはずである。そしてやはり、適切な文脈を与えてやればこの意味は見事に実現する。

(3.6) (こわれた壺が元に戻る手品で)今から２時間この壺をこわします。その間見るなり触るなりして確かめてもらって構いません。２時間後、私がそのこわれた壺を見事元に戻してみせましょう。

大切なのは、ある表現が容認しにくい、もしくは容認できないと感じられても、その原因を単純に語に求めないということである。いろいろな論文で非文とされている文であっても、適切な文脈を考えてやったり異なった文脈においてやったりすることによって誠に自然な文となる、ということはよくあることである。すなわちその意味解釈を阻害しているのは語そのものではなく実はその語のおかれた文脈やその語に関連する現実世界での出来事である、という場合が非常に多いのである。寧ろ、語自体は実にいろいろな意味に開かれた自由な存在なのである。その語に足枷をはめているのは、その他の要因なのである。

例えば、フィールドの調査などで「『いま雨が降っている』はどう言いますか」と尋ねると「でもいまは晴れているじゃないか」といわれて例が採れなかったり、或いは敬語の調査などで「そのようなことは話題にすること自体が失礼である」という理由で「いわない」との判断をされたりすることがよくあるらしく、苦労しますね、という話とともに、データをそのまま鵜呑みにしてはいけませんね、という話を聞くことがある。然し、例えば(3.3)の例は非文(もしくは非常に容認しにくい文)であるということを、動詞が固有にもつアスペクト的意味の所為である、と主張するなら、その研究者は実はそれと同じことをしているのである。

観察を続けよう。

(3.7) 綺麗な形でおちる

「綺麗な形で」というのが様態修飾である場合、修飾される事象は様態部分を含んでいなければならない。ということは、必ず①の漸次変化過程形のアスペクト的意味をとり、修飾表現はその変化過程部分を修飾することになる。それに対して「綺麗な形で」という同じ表現が結果修飾である場合[21]、今度は終結点をもたない①の漸次変化過程形のアスペクト的意味で解釈することはできない。

(3.8)a. 5秒間綺麗な形でおちる
　　b. 綺麗な形でおちつづける

それ故、期間修飾表現を伴う(3.8a)の例文では、①の漸次変化過程を修飾する様態修飾表現として「綺麗な形で」を解釈するのが最も自然な解釈であり、辛うじて結果修飾表現として解釈されるにしても③の結果維持過程を修飾するものとして解釈されるのみである。同じく(3.8b)の場合も、アスペクト補助動詞「～つづける」は過程を含むアスペクト的意味をもつ事象をあらわす場合しか接続することはできない。よって(3.8b)の例文も、最も自然で無標の解釈は①の漸次変化過程形のアスペクト的意味を採る解釈となり、それに従って「綺麗な形で」という修飾表現も様態を修飾すると解釈されやすくなるのである[22]。

最後にもうひとつ例を見ておく。

(3.9) 集まっておいて下さいね

この文もまた幾つかの意味に展開することができる。ひとつは②の移行形のアスペクト的意味を採る場合で、その場合は「いまは集まっていないけれど、その時までには集まっておいて下さいね」というような意味になる。それに対して③の結果維持過程形のアスペクト的意味を採ると考えるなら、「先生は少し職員室に戻りますが、みんなこのまま集まっておいて下さいね」というような、まさに「移行」と対照を為す「維持」の意味で解釈することができる。因みに①の漸次変化過程形のアスペクト的意味については、終結点をおそらく必要とする「～ておく」というア

[21] 同じ表現形式が様態修飾にも結果修飾にもなるということについては、国広(1995)を参照。

[22] 何度も繰り返すようではあるが、勿論②の移行形のアスペクト的意味を採ったり、③の結果維持過程形のアスペクト的意味を採ったりすることはでき、その場合は勿論同じ修飾表現形式は結果修飾表現として機能することになる。

スペクト補助動詞の性質のため、この意味では採れないのではないかと思われる[23]。

以上で、ひとつの動詞形式がかなり自由にさまざまなアスペクト的意味を採ることができる、ということが証明できたと思うし、その「アスペクト的意味の形」という道具だて自体がどのようなものであるのかということも幾分わかっていただけたと思う。

4．その他の関連事項

本章では、これまでの議論に関係すること、関係するかもしれないこと、について幾つかトピックを選んで話を進めていく。

4．1　「まで」のあらわす到達範囲と限界づけ的性質

アスペクト的意味を語るにあたってトピックにのぼるのが「まで」という助詞である。小西(1997a)では「まで」と「に」について、アスペクト的意味の立場からこのふたつが大きく違う性質をもつこと、すなわち「まで」により終結点(到達点)が示されている場合は変化過程が漸次的である解釈が得られるのに対し、「に」により終結点(到達点)が示されている場合は変化は過程的でない(すなわち移行的である)ことを示した。ここで少しふりかえっておく。

(4.1)a.少しずつ　時給を800円まであげる
　　b.少しずつ　時給を800円にあげる

上の例文(4.1)を注意深く観察してみると、「まで」句を伴う(4.1a)では時給がだんだん高くなっていき、遂には800円に達したという意味をあらわしているのに対し、「に」句を伴う(4.1b)では複数回生起の解釈しか得られない。すなわち、例えば「勤務日数が長い人から順に少しずつ、時給を800円にあげる」というような場合である。これは、「まで」を伴う(4.1a)では、変化は時給が800円に至るまでの漸次的なものであるのに対し、「に」を伴う(4.1b)では、変化は時給が800円になるという移行的なものであるということを示している。

[23] 例えば「温度をあげておいて下さいね」という場合、「次に来たときには温度をあげはじめておいて下さいね(＝次に来たときには温度が漸次的に上昇中)」という意味に解釈することにより、①の漸次変化過程形のアスペクト的意味を実現していると思えるかもしれない。しかしこれはおそらく「NOT 変化→変化開始」という移行もしくは結果維持過程にあるという分析のほうがよいように思われる。ただ、2.3でも述べたように、これらのアスペクト的意味の形は原子的要素をあらわしていなくとも構わないので、これ以上の(不要な)恣意的分析はせずにおきたい。

ここで、「まで」について精緻な分析を行った影山・由本(1997)を見てみよう。ここでは「に」と「まで」について次のように書かれている。「このように、「に」が最終的な着点を表すのに対して、「まで」(英語では up to, as far as)は移動が及ぶ範囲を限定する働きをする」(ibid.:141)。同書ではまず移動動詞に関して、「起点／着点指向のもの」と「経路指向のもの」とがあり、それぞれ「に」「まで」と共起し得る、ということで「到達範囲」という概念を導入している。そして、そのあとで「そのような範囲限定は移動動詞に限らず」(ibid.:141)と書かれているのであるが、移動動詞以外の例はひとつふたつしかなく、あまり詳しくは書かれていない。

実は、影山(1996:60)において「抽象的な状態変化は、物理的な位置変化ないし移動が比喩的に拡張したものと考えられる」と述べられているとおり、「まで」の扱いに関しても「状態変化」の「到達範囲」としてよいと思われる[24]。

ではこの到達範囲という概念は、本稿で見てきたアスペクト的意味の形にどのような影響を及ぼすものなのであろうか。ずばり、それは「限界付与子(delimiter)」としてはたらくのである。非有界の事象に対して限界を付与するのである。

「まで」句が限界付与子である証拠として、②の移行の意味をもつときの変化事象をあらわす文と単純には共起できないということ、そして共起するときは複数回生起の意味をもたざるを得ないことを挙げることができる。すなわち、②の移行形のアスペクト的意味をもつ文は、既に終結点によって終結されている有界の事象をあらわしているので、ここに新たにもうひとつ終結点を付与する「まで」句を伴うことはできないのである。次の例を参照してほしい。

(4.2) 6時まで破れる

これを②の移行形のアスペクト的意味をもつ文であると解釈するならば、それは例えば(4.3)のそれぞれの例文のような複数回生起のものとして解釈する以外にない。

(4.3)a. 6時まで何度も破れる
　　b. 6時まで幾つも破れる

また、「まで」句によって限界づけられると、文のあらわす事象は明示的に有界事象となるため、有界事象をあらわす文とのみ共起できる「1時間以内に」などの

[24] 影山(1996)は、前述のとおり(1.5.2参照)多くの変化動詞を BECOME-AT という述語で取り扱っているため、経路指向の移動動詞と共起する「まで」が変化動詞と共起することについて並行的な説明をすることをためらったのではないかと思う。

修飾表現と共起することができる。この事実も「まで」句が限界付与子としてはたらいている(消極的)証左として挙げることができる。

(4.4) １時間以内に６０度まで曲げる

ここで、「到達範囲」ということに関してアスペクト的意味の形と関連させながら少し詳しく見てみたい。

(4.5)a. ６０個までへる
b. ６時までかたまる
c. 太郎まで(中に)はいる

上の３つの例文のうち、(4.5a)は変化量に関する到達範囲をあらわしている[25]。この場合はもとの事象の変化自身が非有界であることが求められるため、①の漸次変化過程形のアスペクト的意味しか採ることはできない[26]。次に(4.5b)の場合は、時間に関する到達範囲をあらわしている。従って求められることは、事象自身が時間的に非有界であることのみである。よって①の漸次変化過程形のアスペクト的意味のほかに、③の結果維持過程形のアスペクト的意味も採ることができる。最後に(4.5c)の例文は[27]、「NOT はいる→はいる」という変化が複数回生起し、それが太郎「まで」及んだ、というような(或いはそれに近い)「事象に関する到達範囲」をあらわしている。よって②の移行形のアスペクト的意味を採ることになる[28]。この３つのうち「に」と交換可能であるのは(4.5a)のみであるということも、「まで」と「に」との相違を示すと同時に「到達範囲」という概念の多様さを示している。

---

[25] 変化量ということに関して、正確にはふたつの側面がある。ひとつは変化の質的な部分で、変化度合といったほうがよいような側面であり、副詞的表現「ひどく」などで修飾することができる。もうひとつは変化の量的な側面で、変化する対象の量的な部分に関する側面である。例文(4.5a)では量的な側面の「まで」を扱っているが、質的な側面においても「まで」句は共起することができる。例)あれくらいまでとける。ぼろぼろになるまでくずす。など。

[26] 例えば次のような文では「まで」句は③の結果維持過程のアスペクト的意味でとることができる：
２年間、補助金を600万円(に)までへらす。然しここでは「まで」句は限界付与子としてではなく、寧ろ終結点に特定の値を付与するものとして用いられているものであるので、ここでの議論に関係はない。

[27] ここではモダリティ的意味を含む「まで」、すなわち「あの(期待値の低い)太郎までもが(中に)はいる」という意味での「まで」ではなく、例えば「はじめの人から順に太郎まで、中にはいる」という意味での「まで」をあらわす。

[28] 事象に関する到達範囲ということに関しては４.６も参照。

４．２　「２時間」の限界づけ的性質

前節でみた「まで」と同じく、「２時間」などのような期間修飾表現もまた限界付与子としてはたらく。

(4.6)a. ２時間しずむ
　　b. #２時間京都に着く

(4.6a)が②の移行形のアスペクト的意味を採ることができないのは[29]、移行形のもつ終結点という性質と、期間修飾表現「２時間」のもつ限界付与子としての性質が衝突してしまうからである。それ故、特定のアスペクト的意味しか採ることのできない「着く」のような動詞(４．５参照)と共起させてみると、そのことがはっきりする。「着く」は②の移行形のアスペクト的意味をあらわすことしかできないので、限界付与子としてはたらく「２時間」のような期間副詞表現とは共起することはできず、複数回生起の意味を採ることなしには(4.6b)の文は非文になってしまう。このことからも、「２時間」などの期間修飾表現が限界付与子としてはたらいていることが示される。

４．３　ドアをあけたがあかなかった

本節では変化事象とはたらきかけとの関係について、少しふれてみることにする。池上(1981)において、日本語と英語で互いにほぼ対応すると思われる動詞について比較してみた場合、日本語の動詞は英語の動詞に比べて意図された結果の達成を必ずしも含意しない場合が多い、とされて以来[30]、動詞の「達成性」についての研究が幾つか為されてきた。そのなかでも最もよく知られているのが宮島(1985)である。宮島(1985)は日本語において結果性が問題になる動詞を３つに分類し、そのうちの「基本的には結果をふくむのだが、ある場合には、その手まえの段階に重点がおかれるもの」について、「ドアをあけたがあかなかった」式の表現がどれだけ日本語として自然なものであるかということに関する調査をし、動詞別に自然度の順序づけを行った。そしてこの順序づけをもとに日本語の動詞の結果性(の含意)のつよさ

---

[29] 例によって複数回生起の意味を除く。

[30] 池上(1981:266)では以下のような例を挙げてそれを例証している。

例) 1)a. 燃ヤシタケレド、燃エナカッタ
　　b. *I burned it, but it didn't burn.
　　2)a. 沸カシタケレド、沸カナカッタ
　　b. *I boiled it, but it didn't boil.

の順序づけを提示した(すなわち「ドアをあけたがあかなかった」式の表現の自然度が低い動詞ほど結果性の含意はつよいということである)。

然し事象の変化に関する部分とはたらきかけに関する部分を切り離して考えた小西(1997a)において、結果性の強さは個々の動詞に内在化された固有の意味ではなく、その動詞の意味するところの現実世界における出来事が関係しているのであり、それ故結果性の含意は宮島(1985)のように動詞が固有の意味としてもっていると考えるのではなく、むしろ変化事象の解釈におけるはたらきかけと変化の関係によって生じてくるとして捉えるべきである、ということを主張し[31]、次のような結論を得た。ここに再掲することにする。

(4.7) はたらきかけが、変化が始まってからも行われていると解釈される場合には結果性の含意が強くなり、「ドアをあけたがあかなかった」式の表現は容認しにくい。逆にはたらきかけが、変化が始まる以前で終わってしまったと解釈される場合には結果性の含意は弱くなり、「ドアをあけたがあかなかった」式の表現が容認しやすくなる。

この時点では時間的関係が要因であるという分析を行っていたのであるが、時間的関係は寧ろ二次的なもので、実際には変化他動詞があらわすアスペクト的意味(或いはここまでくると事象意味といったほうが正確か)に２つの形がある、というのがより本質的であると思われる。すなわち、結果が達成した状態までを含めた事象意味をあらわすのか、そうではなくはたらきかけそれ自身に焦点をおき結果達成に関しては本質的に含まれなくともよいという事象意味をあらわすのか、という２つの形である。具体例を見てみよう。

(4.8) a. こわしたけれどこわれなかった
　　b. プレス機に入れてこわしたけれど、硬くてこわれなかった
　　c. ??粉々にこわしたけれどこわれなかった

(4.9) a. すいかを冷やしたが冷えなかった
　　b. 冷蔵庫に入れてすいかを冷やしたが、こわれていたので冷えなかった
　　c. ??10℃にすいかを冷やしたが冷えなかった

[31] 例えば結果性の含意が強いとされる動詞「こわす」であっても、適切な文脈を与えてやると全く不自然でなくなり(例文(4.8)参照)、これもまた動詞に固有の意味であるとは考えてはいけない部分と考えられるからである。

変化他動詞それ自身は、レキシコンにおいてどちらの意味に対しても開かれている。それに対して「ドアをあけたがあかなかった」式の表現をとる(4.8a)(4.9a)の例文は、矛盾なくこれらを解釈しようとすれば必然的に「本質的に結果達成を含まない」意味解釈のほうを採らざるを得ない。両例文が容認しにくい場合は、それぞれ(4.8b)(4.9b)のような状況(或いは共起表現)を考えてやるとよい。

２つの事象意味がある、という主張が形而上的で恣意的でない証拠が、(4.8c)(4.9c)のそれぞれの例文である。ここでは更に結果状態を修飾する表現が加わった文となっている。ここでは「本質的に結果達成を含まない」事象意味をとる「ドアをあけたがあかなかった」文と、「結果状態を修飾する」ことを本分とする表現とが共起しているため、これらの文の容認度が著しく低下しているのである[32]。

結局、(4.7)で再掲した基準についても、これらのふたつの意味があることから説明がつく。すなわち、「はたらきかけが、変化が始まってからも行われていると解釈される場合」というのはおもにはたらきかけが結果の達成と密接に関連しそれを含む事象意味の形を採る場合となる可能性が高くなるので「結果性の含意が強くなる」。それに対し「はたらきかけが、変化が始まる以前で終わってしまったと解釈される場合」というのはおもにはたらきかけが結果の達成を本質的に含まない事象意味の形を採る場合となる可能性が高くなるので「結果性の含意が弱く」なる、と考えることができる。時間的関係は二次的に出てくる意味である、とはじめに言ったのはそういうことである。

４．４　三項動詞について

日本語において［ガ格・ヲ格・ニ格］をとる三項変化動詞や、それと自他対応する動詞には、①の漸次変化過程形のアスペクト的意味を採れないものが多いようである。

(4.10) a. ??メッセージがだんだん市長にとどく
　　b. ??情報が前よりも敵の手にわたる

これは本章１節でも見たように、ニ格というのは到達範囲ではなく着点を直接指示するような意味機能をもつことが関係しているのではないかと思われる。但し、完全に非文であるといえない側面もあり、果たして動詞が固有にもっている意味であるのかということは慎重に考えなければならない。

[32] 完全な非文とならないのは、意図性の問題と関連してくるからである。小西(1998)参照。

４．５　特定のアスペクト的意味を採れない動詞

さまざまな変化動詞のなかには、第２章で措定した３つのアスペクト的意味のいずれかを採れないものがある。

例えば第１章で扱った「死ぬ」のほか、「のこる／のこす」「あまる／あます」などは①の漸次変化過程形のアスペクト的意味をあらわせない。

(4.12) a. #徐々に死ぬ
　　b. #少しずつのこる

例文(4.12)は、複数回生起の意味でないなら、非文である。これらは②の移行形のアスペクト的意味(4.13a)や③の結果維持過程形のアスペクト的意味(4.13b)は採ることができる。

(4.13) a. ３年で死ぬ
　　b. ２時間のこす

逆に「おちる」「決まる」などは、③の結果維持過程形のアスペクト的意味を採れないようである。

(4.14) ?? ２時間道におちる

「着く」「はじまる／はじめる」「ほろびる／ほろぼす」などは、①の漸次変化過程形のアスペクト的意味、③の結果維持過程形のアスペクト的意味の両方をあらわせない。あらわすことができるのは②の移行形のアスペクト的意味のみである。それはこれらの動詞と「２時間」などの期間修飾表現とが共起できない(複数回生起の意味を除く)ことから示すことができる。

(4.15) a. #２時間京都に着く
　　b. #２年間ほろびる

４．６　始動相[33]

そのほかアスペクト的意味に関するものとしてよく挙げられるのが始動相である。

[33] 本節は小西(1997c)の一部を改めて文章化したものである。

本節ではこの始動相についての若干を述べることにする。

4．6．1 「から」

「から」は、日本語の文法の枠組みではしばしば格助詞として扱われてきた。格文法が盛んになってくると、カラ格は「起点格」としての意味機能を与えられ、それに一役買うことになった。カラ格を文法格と考えるにせよ意味格と考えるにせよ、その意味機能は現在まで「起点をあらわす格助詞」ということで大体一致していると思われる。最近のものでは仁田(1993)、城田(1993)などの研究があるが、いずれも「から」の起点的意味について、「空間的起点(船底から飛び出した)」と「状態的起点(二等兵から一等兵になった)」などを認めているのみで、特に新しいものではない。

然し、「まで」のところで見たように(4．1参照)、到達範囲という概念にもさまざまな意味野があるのと同じく、起点という概念に関してもさまざまな意味野にわたる分析が必要である。以下、起点ということで一括りにしてきた「から」句を分析しなおし、そのなかには必ずしも(動詞との特定の関係を結ぶという意味での)格助詞とはいえないような「から」句が見つかることを述べる。

まず「から」には場所的な起点をあらわすはたらきをもったものがある。この場合、場所は空間的な位置でも抽象的な状態でも構わない。

(4.16) a. 部屋から出る
　　b. 悲しみから立ち直る

これは「通常、基本的な」カラ格の用法といえるだろう。視点のとりかたによっては場所的なものでもいろいろに広げることができる。

(4.17) a. 前の入り口から乗る
　　b. 京都から乗る

次に、時間的な起点をあらわす「から」句がある。

(4.18) a. ６時から放送する
　　b. １０月から月刊になる

これは明らかに格文法の起点格を示さず(つまり動詞との格関係はあらわさない)、寧ろアスペクト的意味に関しての意味機能をもつ。

然し従来見過ごされてきたか、特に注目されてこなかった(と思う)ものに、「事象の起点」をあらわす「から」句がある(「まで」と同様。４．１参照)。次の例文を見ていただきたい。

(4.19) 太郎から蹴って下さい

これは勿論時間的な起点ではないし、通常は場所的な起点でもない。そして更に驚くべきことには、この文は実に以下の４つの意味をあらわし得る文なのである。まずひとつめは「太郎がはじめに蹴り、次に次郎が蹴る」場合。「そこにあるボール、まず太郎から蹴って下さい」。ふたつめは「はじめに太郎を蹴り、次にその隣の次郎を蹴る」場合。「じゃあ端っこのボールから蹴って下さい」と同じで、蹴られるのが人間になるだけである。ここまでは比較的容認しやすい解釈であると思われる。ここまでで実は議論としては充分なのであるが、この例文は更に二つの意味にも開かれている。３つめの意味は「まず太郎が蹴り、次に次郎がキャッチし、最後に三郎がセットする」というような状況のときである[34]。同じように４つめの意味を導き出すことができる。すなわち「まず太郎を蹴り、次に次郎を突き飛ばし、最後に三郎を斬る」というような状況のときである[35]。

これは基本的な格関係の上から更なる意味機能を「被せる」ということから、従来の「副助詞」とか「取り立て詞」(「も」「だけ」等)に近い、もしくは同じ機能をもつ部類のものであるということができる。また「起点格」をとる動詞においてもこの「事象的起点」をあらわす「から」句は共起することができるので、これは深層の意味格ではないことがはっきりと証明される。

(4.20) それでは一年生から、体育館から出ます[36]

「から」は起点をあらわす、という従来の分析は、確かに間違ってはいない。然

---

[34] このままでは解釈が困難であるかと思うので、コンテクストを付加する。例えばスポーツドラマをつくるとき、このような段取りとなるシーンがあった。そこで、最高のカメラワークとなるような構図を考え、それぞれのポジションにカメラを配置し、準備万端整った。で、３人の役者に声をかける。「準備ＯＫです。それでは太郎から蹴って下さい！」

[35] (4.19)の例文は実にここまでの意味をあらわすことができるにも拘わらず、「太郎をまず蹴り、次に転ばせ、最後に踏みつける」といった解釈、すなわち「太郎を [『蹴る』から] する」というような意味は日本語においてはあらわせないようである。

[36] 更に「#それでは [一年生と体育館] から出ます」が同じ意味をあらわすことができないことから、「一年生」と「体育館」が異なった深層格を担っていることが明らかである。

し、それらがいったい何の起点であるのかということを明確にしなければこれらの違いを適切に捉えることはできないナイーブな分析になってしまうのである。

4．6．2　「はじめる」

始動相のもうひとつのトピックは、この「はじめる」である。この動詞は単独で主動詞として文を構成することもあれば、アスペクト補助動詞として複合動詞の後項としても機能する。

まずはじめにアスペクト補助動詞としての「～はじめる」を見てみよう。Matsumoto(1996:Chapter7)においても指摘されているとおり、アスペクト補助動詞としての「～はじめる」にはふたつの種類がある。ここでの議論に沿って説明をすると、ひとつは「単一の事象での局面をあらわす」とでもいえるもので、以下のようなものである。

(4.21) a. 今日５時から夕食を食べはじめる
　　b. 朝から雨が降りはじめる

それに対しもうひとつの「～はじめる」は、「複数の事象のなかでのようすをあらわす」とでもいえるもので、以下のようなものである。

(4.22) a. ６月から毎日ピーマンを食べはじめる
　　b. 毎朝つづけて聖書を読みはじめる

これらの「～はじめる」の文法的説明については影山(1993)や Matsumoto(1996)を参照いただきたいが、「～はじめる」を単純に「始動相」として一括できないことはここに特筆しておくべきであると思われる。それは先程から述べてきた「から」や「まで」と軌を一にする方向性である、というと言い過ぎであろうか。

次に主動詞としての「はじめる」を見る。次の例からもわかるように、主動詞としての「はじめる」は、ヲ格の項としてとれるのは出来事名詞のみである(例文(4.24)参照)。

(4.23) a. 会議をはじめる
　　b. 芝居をはじめる
　　c. *机をはじめる
(4.24) a. 今日、会議がある／会議をする
　　b. 今日、芝居がある／芝居をする

c. #今日、机がある／*机をする

そして、主動詞の「はじめる」はカラ格をとるといわれる。

(4.25) 太郎からはじめる

然し、これは「から」のところでも見たとおり(4．6．1参照)、他のガ格やヲ格に比べて純粋な文法格とは言いがたいところがあり、且つ「5時からテレビを見る」のようなカラ格のような随意的な意味格をあらわしているとも言いがたいような気がする。

寧ろ、主動詞としての「はじめる」というよりは「何かをしーはじめる」「何かが起こりーはじめる」という、コト的なものを項にとる特殊な動詞として、意味的には勿論、構文的にも他の動詞とはその扱いについて一線を画したほうがいいように思われる。そしてコト的なものを項にとるということは、意味的にはアスペクト補助動詞としての「～はじめる」とほぼ等しい価値をもつと考えてよいのではないか、と思われる。

4．7　可能性への状態

これは変化自動詞にのみ見られる現象であるが、可能性への状態とでもいうべき意味をあらわすことができる。

(4.26) a. いいお坊さんは、はじめの５０年はすぐにみつかる
b. 少しのことでこわれる

それぞれ対応する変化他動詞を用いてあらわすと、(4.26a)の場合は「いいお坊さんは、はじめの５０年はすぐにみつけることができる」というようになるし、(4.26b)の場合は「少しのことでこわしてしまう」というようになる。いずれも変化他動詞単独ではこの意味はあらわすことはできない。

これらの意味は、複数回生起や反復の意味と同様、レキシコンに登録されている動詞自体が固有にもつ意味であるとは考えがたく、この事実もまた従来のアスペクト処理や動詞分類の理論では説明できないと思われる。

5．まとめと展望

近年の言語学の研究において、統語論が高度に発達した反動からか、その統語論

の基礎となる「語」の研究が非常に活発になってきている。そしてそれは意味論の問題と密接な関わりをもち、統語論に比べてより一層の恣意的判断を避ける慎重さが求められなければならない。

本稿では、第３章までのところで「アスペクト的意味」を「動詞がレキシコンにおいて固有にもつ意味」から区別し、アスペクト的意味は動詞がレキシコンにおいて本質的にもつ意味ではなく、寧ろ別の部門で与えられる、或いは処理される意味であることを主張した。続く第４章では、アスペクト的意味に関係するトピックを扱いながら、それ以外の意味についても「動詞がレキシコンにおいて固有にもつ意味」と考えないほうがよいと思われるものがあることを述べ(意図性や起点的意味、可能性への状態など)、更にそのような意味が他にも多く存在するであろうということを予感させるものとなった。

結局、動詞が固有にもつ意味とは何なのかということについては、本稿では素描さえすることはできなかった。然し、アスペクト的意味の重石が取り除かれ、その帳が外された今、徐々にそれらの意味についても光があてられていくことになるだろうと思われる。また、アスペクト的意味についても、動詞とは距離をおいたところで独自に取り扱うことができるようになった。これらのことは、新しい展望を拓くのに有用な素材になると思う。

我々が言語を使って何を為すのか、何を行っているのかを見極めるためには、更なる精緻な観察と、恣意的なものに陥らない慎重な分析が不可欠である。学際的研究がすすむなか、このことはどれだけ意識してもしすぎることはない、と思う。

＜参照文献＞

池上嘉彦　1981　『「する」と「なる」の言語学』，大修館書店

井上和子　1989　「～テイル」井上和子(編)『日本文法小事典』182-190，大修館書店

影山太郎　1993　『文法と語形成』，ひつじ書房

影山太郎　1996　『動詞意味論 -言語と認知の接点-』，くろしお出版

影山太郎・由本陽子　1997　『語形成と概念構造』，研究社出版

金田一春彦　1950　「国語動詞の一分類」『言語研究』第 15 号，日本言語学会(金田一春彦(編)『日本語動詞のアスペクト』1976，5-26，むぎ書房 に所収)

国広哲弥　1995　「言語の認知的側面」『日本語学』第 14 巻第 10 号，11-18，明

治書院
小西正人　1997a　「現代日本語における変化事象表現」，京都大学大学院修士論文
小西正人　1997b　「変化事象の型と語彙概念意味論」，京都大学大学院修士論文参考論文
小西正人　1997c　「日本語の「複数性」コレクション」，京都大学大学院演習ハンドアウト
小西正人　1998　「意志動詞を解体する」，未発表
城田俊　1993　「文法格と副詞格」仁田義雄(編)『日本語の格をめぐって』，67-94，くろしお出版
仁田義雄　1983　「動詞とアスペクト　ー語彙論的統語論の観点からー」『計量国語学』第14巻第3号，113-128，計量国語学会
仁田義雄　1989　「拡大語彙論的統語論」　久野暲・柴谷方良(編)『日本語学の新展開』，45-77，くろしお出版
仁田義雄　1993　「日本語の格を求めて」仁田義雄(編)『日本語の格をめぐって』，1-37，くろしお出版
宮島達夫　1985　「「ドアをあけたが、あかなかった」ー動詞の意味における＜結果性＞ー」『計量国語学』第14巻第8号，335-353，計量国語学会
森山卓郎　1983　「動詞のアスペクチュアルな素性について」『待兼山論叢　文学篇』第17号，1-22，大阪大学文学部
森山卓郎　1988　『日本語動詞述語文の研究』，明治書院

Declerck, Renaat　1979　Aspect and the bounded/unbounded (telic/atelic) distinction. *Linguistics 17*, 761-794. The Hague; Mouton Publishers.
Matsumoto, Yo　1996　*Complex Predicates in Japanese - A Syntactic and Semantic Study of the Notion 'Word'.* California; CSLI Publications & Tokyo; Kurosio Publishers.
Pustejovsky, James　1992　The syntax of event structure. In B. Levin and S. Pinker (eds.), *Lexical & Conceptual Semantics, 47-81.* Cambridge MA; Blackwell Publishers.

（こにし　まさと、博士後期課程）

On Understanding Aspectual Meanings

KONISHI, Masato

It has long been considered that aspectual meanings are an essential part of verb meanings, and that the classification of verbs is the best way of understanding and revealing both the syntactic and semantic properties of verbs.

With careful observation, however, a verb form often represents several aspectual meanings and a naive classification theory cannot explain this. In Japanese, the situation is the same. To explain this fact, some insist that most verbs inherently belong to several aspectual classes. Others insist that co-occurring elements or words change the aspectual meanings of verbs. However, I believe neither explanation is sufficient. Refer to the Japanese example given below.

(1) a. Hazime no 3 punkan wa kasokudoteki ni ondo ga agarimasu
(The temperature rises at an accelerated rate during the first 3 mins.)
b. Tatta no 3 punkan de ondo wa 80 do ni agarimasu
(The temperature rises to 80 degrees in only 3 mins.)
c. Hazime no 3 punkan wa ondo wa 80 do ni agarimasu node gotyuui kudasai
(Take care as the temperature will rise to 80 degrees (instantly) and remain at that temperature for 3 mins.)

1a) represents a situation where a "temperature-rising" process is now proceeding; 1b) represents a situation where a transition to the "temperature-has-risen" state is now achieved; 1c) represents a situation where the "temperature-has-risen" state is maintained for some time. How can the above theories explain this?

This paper aims to show that aspectual meanings should be distinguished from meanings that verbs have inherently in the lexicon and will insist that these aspectual meanings will be assigned in another component of language. Thus I will endeavour to free verbs from aspectual meanings, which don't belong to verbs.